

# 葛城天狗

観世弥次郎作

ワキ 山伏

シテ 天狗

ツレ 役行者

地は 大和

季は 秋

ワキ次第

「法の為めにと篠懸の。く。山又山を分けうよ。

詞

「是は峰入先達の客僧にて候。此度又国々の山伏達を伴なひ。唯今峰入仕り候。

道行

「葛城や。高間の峰の朝ぼらけ。く。花かと思えて白雲の。行方はるけき唄つたひ。なべて訪ふべき旅にやは。我は法にとそみかくだ。苔の莖もいとほじや。く。

ワキ詞

「如何にかたぐへ申し候。今夜はこの処に通夜申

し。心静に勤めをはじめうずるにて候。

シテ

「登々たる山路いづれの時か尽きん。決々たる溪泉到る所に聞く。風葉声を動かして山犬吠ふ。わづかの松火秋雲を隔つ。あな心すごの山洞やな。

ワキ詞

「我観念の眼の前には。三密の月すみやかにして。寥々と有る折節に。忽然と来る者を見れば。さも不思議なる人体なり。

シテ詞

「御身いくばくの法力を得。かばかりの慢心を具足

せし。其妄念はいかならん。

ワキ「さては心得たり。我行力を妨げんとて。魔軍の靈鬼来りたるな。愚かなりとよ法性の。月は曇らぬ山陰に。頭はれ出づる名を名乗れ。

シテ「是は此山に年経て住める。大天狗の眷属なり。まづ此由を師匠に申さん。其程はこゝに待ち給へと。

地「夕べの雲も冷ましく。く。嵐はげしき高嶺より。らうせいのかうしやうにて。帰れといへば谷

峰も。響き渡れる山彦の。呼べば答へて失せにけり。く。(中入)

地「山河草木震動し。風は木を折つて盤石を崩す天狗だふしに。心も乱るゝばかりなり。

後ジテ「抑是は。此山に年経てすめる大天狗なり。

地「不思議や高嶺に吹き乱す。く。嵐木枯うつまくと見えしが。頭はれ出でたる大天狗の。嘴足剣の刃の如くにて。両眼日月に異ならず。

ワキ 「旋陀摩訶嚕遮那。娑婆多耶吽多羅吒干輪。

地 「行者の加持力隙もなく。く。揉みかけ責めかけ  
祈り給へば。其時岩屋は鳴動して。大石左右へ開  
くと見えしが。おのく眷属二行に座して。役の  
行者は顕はれたり。

行者 「汝知らずや我は是れ。今末の世に至るまで。仏法  
を守護し衆生を守る。開山役の優婆塞なり。

地 「大天狗は是を見て。く。驚き高嶺に登らんとす

れども。伎楽童子は追つ詰め給ひ。散々に打ち伏  
せ苦を見せ給へば。梢にすがり。遥かの谷に下り  
けるを。

行者 「行者は御杖を取り直し。

地 「汝知らずや神国たり。など仏法に妨げをなしと。  
怒り給へば今より後は。仏法を守護神となるべし  
と。約諾堅き岩根を翔り。翔り行けば。優婆塞  
は眷属を伴ひ給ひて。又巖窟にぞ入り給ふ。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第二輯』大和田建樹 著